

## 第41回インナーゼミナール大会

### 研究計画書

<b>ゼミ名</b>	高ゼミⅡ	<b>チーム名</b>	コ☆ヨンチュ
<b>タイトル</b>	携帯電話を取り巻く世界競争		
<b>テーマ群</b>	d)国際経済		
<b>メンバー</b>	鈴木明哉、藤本友亮、安井裕昭、三好大和、浜高弘揮、山本浩二郎、高山拓也、長谷川将也、丸尾美奈子、香川恵吾、鈴木康裕、川口拓馬、福田和馬、三木勇太、大城駿、吉田将彬、南泰行、福川義仁、碓井翔太		
<b>研究計画内容</b>	<p>私達高ゼミは、世界の携帯電話端末産業について調べました。世界の中でも特に韓国、フィンランド、日本を中心に調べ、3つのグループに分かれてそれぞれを比較しながら研究しました。</p> <p>グループ1は、韓国についての研究です。近年、急速に成長し頭角を現した韓国企業サムスンで、現在携帯端末市場において1位のノキアに続いて第2位のサムスンですが、わずか20年で第2位にのぼりついた、その原動力のヒミツは、、、!?グループ1は韓国の携帯電話産業の流れと、その中でサムスンがどのように成長していったのか探りました。その中で、サムスンと他の企業との違いがどのように急成長に結びついたのか、明らかにしていきます。</p> <p>グループ2はフィンランドについての研究です。フィンランドには、ノキアという電気通信機器メーカーがあり、携帯電話部門において、世界でトップシェアを誇ります。しかし経済国である日本でのシェアはなく、元々は製紙パルプ会社でありました。ヨルマ、オリラ率いるノキアがなぜ携帯電話部門においてトップをとれるようになったのかを歴史、強み、GSM(デジタル携帯電話規格)と NMT(アナログ式移動体通信の規格)の違いという三点を重要視しながら研究しました。</p> <p>グループ3は日本についての研究です。日本の携帯産業が高い技術を持ちながら世界シェアで見ると日本メーカーは下位に位置しています。そこで、なぜ日本のメーカーは海外進出できなかったのかなど様々な視点から問題点を繰り下げ今後の日本携帯電話メーカーの歩むべき道を研究しました。</p> <p>この3つの視点から今後世界競争はどのような展開を繰り広げていくのか、みなさんも一緒に考えていきましょう。</p>		